



宮崎県立都城泉ヶ丘高等学校附属中学校学校だより 第11号 (H23. 7. 19)

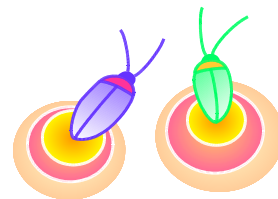
宮崎県都城市妻ヶ丘町27-15

TEL: 0986-23-0223 FAX: 0986-24-5884

校長 前田 哲司

質実剛健

「実力と気品をそなえ、たくましくあれ！」



平和学習に行ってきました！

～ 社会科宿泊体験学習 ～

附属中2年生は、7月12・13日の1泊2日で長崎市での平和学習を中心にした社会科宿泊体験学習を行いました。目的は、3つありました。一つは、長崎原爆資料館や平和記念公園、その周辺地域での見学を通して、平和の尊さを実感し、平和を願う心情や態度を培うこと、一つは、長崎三菱造船所見学を通して、日本の造船業や海運業の歴史や実情を知り、造船業から見えてくる日本の工業の実態を理解すること、一つは、佐賀県吉野ヶ里遺跡の見学を通して、古代の東アジアにおける日本の歴史を考えることです。



旅行程

長崎原爆資料館 → 原爆落下中心地 → 平和公園 → 永井隆記念館 → 大浦天主堂・グラバー園
三菱重工長崎造船所香焼工場見学 → 吉野ヶ里歴史公園

平和の集い 平和を誓う 2年A組 藤岡ゆい

8月9日、午前11時2分。この時、長崎に落とされた、たった1個の爆弾で、約7万4千人が亡くなり、また約7万5千人が負傷しました。その6日後に終戦を迎えた第二次世界大戦では、各地で殺し合いや収監など同じ人間同士とは思えないほど残酷なことが行われていました。先日、その光景を記録したビデオを見た私は、あまりの恐ろしさに言葉を失いました。それには、当たり前のように各地で攻撃や殺し合いが行われている光景などがあり、私の今までの戦争のイメージをはるかに越えていました。私は、ビデオを見た後だけでなく戦争の話を見たり、聞いたりする中で、「なぜ、戦争をしなければいけないのだろう。」とよく思います。戦争では、得るものよりも失うものの方が大きいと思うからです。戦争をして勝てば、領土や資源などは手に入れられるし、負けた国はその分多くのものを失うこととなります。しかし、命はどんな方法を使っても取り戻すことはできません。勝った国、負けた国のどちらも尊い命を犠牲にしたということを忘れてはならないと思います。日本でも多くの命が奪われました。私達には、その死を無駄にすることなく改めて命の尊さについて考えていき、もう2度と戦争を起こさないようにするという役割があり、それが平和への第1歩だと思います。



平和講話 講師 永野悦子氏

講師紹介：1945年8月9日、学徒動員として勤務中に、16歳で被爆。自宅は全焼し、戸外にいた弟は全身火傷のため3日後に死亡。自宅で被爆した母と妹は原爆症に苦しみ、母は一命を取り留めたが、13歳の妹は苦しんだあげく、一ヶ月後に死亡。生き残った者たちの、怒り、苦しみ、寂しさ伝えたい。この目で見た原爆の恐怖、そして悲惨さを語ることによって、平和の尊さを訴え続けたい。



を

被爆体験講話を終えて 木脇 英嗣

今、日本に原爆が落とされたら……、今回の体験学習を終えて、そのことを考えると、正直、鳥肌が立ちました。僕たちは今まで、平面の文字や写真などでしか原爆というものを勉強してきませんでした。しかし、今回、止まった時計、溶けてしまったガラス、人の手の骨、そして永野さんの実際に体験した人にしか話せない重みのある話、このようなものを見たり聞いたりして自分の肌で感じ、投下された後の長崎は、はるかに僕の想像を超えた、まさに「地獄」であったと知りました。永野さんの話の中で、僕は、「絶対に原爆を使った戦争を繰り返してはいけない」と強く、何度もおっしゃっていたのが心に残っています。しかし、今現在「核」を兵器として持っている国がない訳ではありません。「核」をこの世から消し去るべきだと強く思いました。今、僕たちは「平和」というものが当たり前のように生きてしまっていると思います。これから、平和というものは、数え切れない程の人々の犠牲のおかげで成り立っているととても尊いものだと感じながら生きていこうと思います。そして、次の永井隆さんの言葉を胸に刻んで忘れないようにしたいです。「戦争に勝ちも負けもない。あるのは滅びだけだ。」



被爆体験講話を終えて 原口 龍紀

今日、被爆体験の講話を終えて、戦争は本当に悲劇しか生み出さない人類の罪ちだと思った。永野さんが水に少しも手をつけずに、自分の一番悲しい思い出を長い間真剣に語ってくださったので私も真剣に話を聞くようにした。原爆資料館に行って、つい目をそらしてしまうような写真をたくさん見て、戦争の悲惨さを目で知ることができた。そして、永野さんの話を聞くことによって、原爆がさらに恐ろしいものだったと分かった。すっかり汚くなった川で次々と人が水を飲み、「水を下さい」と言って亡くなる人がたくさんいたと言っていた。皆死を分かっている。せめて水を飲みたいと思っていたのだと思う。そして、苦しみながら亡くなった弟さんも、家族のもとで亡くなったのは不幸中の幸いと言っていたのが、とても心に残った。とても苦しんでも幸いと呼べるような状況は、とても悲惨であると思う。心から日本が平和であることをとても幸せに感



じた。これらの話を聞いて、将来世界中が国境を越えて互いを認め合う戦争のない世界であってほしいと思った。最後に永野さんが「折り鶴」の曲を聞いて涙されていた。私達の歌によって、永野さんに感動を与え、心を少しでも癒してもらえたのであれば、とても幸せである。私も平和を願い、心をこめて歌った。

「折り鶴」を精一杯心を込めて、みんな歌いました！

